

アフガニスタン・イスラーム共和国国立公文書館職員に 対する修復保存技術研修受け入れについて

国立公文書館 業務課修復係長 有友 至

1. はじめに

2004年12月21日にアフガニスタン国立公文書館館長と職員が来館された。その際、修復室を見学された同行の職員の方が非常に熱心に修復について質問され、裏打ちの方法などのメモを取っていた。海外の方にあれほど熱心に質問されたことがなかったので印象に残っていた。そして今回研修に来られたのが、熱心に質問されていた職員のゴドラトッラー・マアスミー氏であった。

彼の研修時の話によると、最初の訪日で、修復しなければならない資料を大量に抱えて困っていた彼にとって、機械に頼らないこの日本の伝統的修復は母国で充分通用するのではないかと感じたとのことであった。そして2年後、東京外国語大学の招聘で日本での研修が実現した。彼らと我々が宗教、生活、風習などの文化の違いをお互いに認識しつつアフガニスタンの貴重な資料を将来に残すため行った、約1か月間の修復技術研修について報告する。

概 要

研修受け入れ期間 平成18年2月6日(月)～3月10日(金)

研修者 アフガニスタン・イスラーム共和国国立公文書館資料部門主任

ゴドラトッラー・マアスミー氏

アフガニスタン・イスラーム共和国国立公文書館カード・カタログ部門主任

アーベデ・モシタリー・ハイダリー女史

招聘元 東京外国語大学

アフガニスタン・イスラーム共和国国立公文書館所蔵群の調査・整理・
保存プロジェクト

ペルシャ語・ダリ語通訳 東京外国語大学の皆さん

研修場所及び担当者

国立国会図書館 水谷愛子氏(和装製本係長)

有) 資料保存器材木部徹氏、永島真帆子氏、小林睦人氏

国立公文書館修復室 有友至、中島郁子他修復室職員

2. アフガニスタン国立公文書館の現状と研修目的

招聘に先立って東京外国語大学の八尾師教授より、アフガニスタン国立公文書館の実情説明を受けた。

アフガニスタン国立公文書館は、1973年に文書の収集、保存機関としてその礎が置かれ、廃絶された王家の所蔵資料、司法省やジルガ（長老会議）、議会などに保存されていた資料を収集して発足した。その後の政治的変動にも拘らず、略奪や破壊を免れ現在に至っている。しかし設立以来戦禍のため、資料の保存管理は十分でなく、所蔵環境の悪さなどにより、資料の保存、修復の必要性に迫られ、しかも長期化した戦乱のために、保存、修復の知識や技術、そして人材も欠如しており、同館に所蔵の貴重資料を守る為に館職員の日本での修復、保存の研修を行ないたいとのことであった。

その他、アフガニスタン国に於いては、日本のように修復器材（特に和紙）など修復に適する紙や保存に適する箱が、手に入らないなど研修前から問題が山積みであることも伝えられた。

そこで、これらを踏まえて研修内容を定めることにした。研修の基本は現地で賄える器材で修復を行うこととし、製品として入手困難な保存容器等については、できるだけ現地製作できる技術を伝えることに決め、研修時に作製した容器等は現地製作のサンプルとして、当館から帰国時に提供することにした。また、当館以外の他機関にもアドバイスを願うことにした。

3. 公文書館内技術研修

2月6日より研修を開始した。

ゴドラツラー氏から要望を聞き、虫食い、埃をかぶった資料、セロテープの黄ばみ除去を中心の研修にすることとした。

洋紙、和紙の相違点や修復に和紙を使う利点、酸性紙問題等修復や保存の基本を口頭で説明し、その後技術研修に移った。洋装本の本格的な修復にはかなりの技術と器材が必要になり、また技術の習得に時間がかかるため、裏打ちと繕いを中心に技術研修を行なうこととした。裏打ちは地図に用いることが可能であり、繕いは洋装本の破れにも応用できるので、裏打ちと繕いを主に反復の練習を行い研修生が納得するまで何度も説明し、手本を見せて作業を続けた。

作業中に糊の作り方、刷毛の使い方なども順次説明し、細かいところは質問を受けながらの研修になる。通訳を介するためお互いの我慢比べでもあったが、この修復技術の習得に1週間ほど時間をかけた。続いて要望のあった埃をかぶった資料のクリーニング、表紙の修復など順調に研修を進めた。

2月21日に来日の遅れていたアーベデ女史が合流する。アーベデ女史は記録管理

部門の責任者であり、アフガニスタンの公文書館の保存状況をここで詳しく聞くことができた。

公文書館の書庫は地下室にあって大理石で作られており、空調は以前稼動していたが、現在は壊れているので、帰国後修理の予定である。書庫内に虫がいて、資料にも同じようにいるらしいなどの説明があった。

これらの説明を受けて、書庫内の清掃を行い、できれば一度資料の総点検を兼ねて、書庫から別場所に移動して置き、書庫清掃を終えた後に排架することや書庫への入退出を可能な限り制限をするなどのアドバイスをした。

また虫害についてアフガニスタンでは、くん蒸施設がなく、専門業者がない等日本のように薬で処理する訳にはいかないの、次のようにアドバイスした。

日陰で風通しのよい場所で虫干しする方法や、ポリ袋に資料を入れて、手に入る薬で少量ずつ殺虫する方法などをゴドラトッラー氏に提案したところ、現地には樟脳に似たものがあるので、それを使ってみるとのことであった。その場合には、資料に影響が無いことをサンプルの経過観察で確認してから、作業をすることなどの注意点を説明した。

その後は、研修中に保存等については気づいたことは随時意見交換するようにし、また、後日ゴドラトッラー氏からまとめて質問状を提出してもらい回答するようにした。

研修スケジュール前半を受けていないアーベデ・モシタリー女史については、帰国後にゴドラトッラー氏から教わることにしてもらい、後半のスケジュールどおりに研修を続けることにした。アフガニスタンの新聞をアーベデ女史が持参したので、新聞紙の破れ部分の補修やセロテープ除去作業、水濡れによる固着資料の処置作業などを行い、よい機会なので、水害による資料のこびりついた泥の除去作業をサンプル等を使用してあわせて行った。

研修後半には、指導した基本技術は習得できたようで、アーベデ女史にゴドラトッラー氏が我々に代わって教える場面も出てきた。文書ファイルなどは自力で作製できるようになった。ゴドラトッラー氏は刷毛の使い方も旨く、修復のポイントをおさえるのが上手で、修復の過程をビデオに収録するなどこの研修にかける熱意が感じられた。短期間の研修では十分に技術を伝授できたとは、思っていないが、この技術を母国に帰ってから続けることが本当に重要であると説明した。

3月10日（研修最終日）には館長及び館職員との意見交換会を開いた。館長より



アフガニスタン研修生の作業状況(1)

アフガニスタン国立公文書館職員へ「今後とも技術援助はしたい」との話もあり、彼らもその言葉に非常に感激していた。最後に修復室としてアフガニスタン国立公文書館での保存、修復について再度意見交換をし、また今後の修復室との連絡の取り方など最終打ち合わせを行って当館の研修を終了した。

4. 他機関への研修依頼について

2月27日から3月1日まで、日本での民間工房である 有) 資料保存器材に研修を依頼した。内容は、アフガニスタンで入手できる紙やダンボールに簡単な脱酸処理を行い保存箱等に使用方法や現地で手に入る小麦粉からの糊の作り方、その他文書ファイル、筒箱、日本における保存方法などの説明であった。さらにアフガニスタンの実情に即した保存方法のアドバイスがあった。

次に3月6日に国立国会図書館を訪問し短時間ながら、和装本の修復室の見学と、当館では行なえなかった洋装本の修復等について、和装製本係長水谷愛子氏より説明を受け、技術的な質疑応答を行った。

このように、幅広い修復方法や考え方を彼らに認識してもらうことは非常に有意義であったと考える。



アフガニスタン研修生の作業状況(2)

5. 研修を終えて

約一か月間の研修で基本だけでも覚えることは難しいことで、彼らの一生懸命な姿勢を見ると、もっとこれも覚えてもらわねばと当館側も知識、熱意を総動員させての研修となった。我々を熱い気持ちにさせたのは、アフガニスタン国立公文書館に勤められるかれらと始めた研修初日の言葉からであった。

「我々は遊びにきたのではない、我々は我々の国の歴史を守り後世に伝えるために日本の保存方法、修復技術を習得するために来たのだ」

この言葉は本当に心に染み込み、一生忘れることは無いだろうと思う。

海外の方たちの受け入れ時には、彼らの生活、風習、特に宗教と食生活には十分に留意しなければならない。今回、研修を終えてみると生活、風習など文化に大きな違いはあったが、打ち解けて話し合ううちに、みなさん良い父親であり、母親であることが判り、教えている我々のほうが今の日本で失われつつあることなどを反対に教わるようなこともあった。この研修がアフガニスタンの歴史を残すことに、多少なりともお手伝いできたのであれば、これ以上の喜びはない。

国立公文書館は、2003年アフリカ・ガーナ国立公文書館職員1名の6か月間の研修受け入れから始まり、今回のアフガニスタン国立公文書館職員2名、今年7月には2004年にスマトラ島沖地震で甚大な災害に遭われた、インドネシア共和国アチェ州立公文書館職員1名及び博物館職員1名の研修を受け入れた。さらに11月には再度アフガニスタン国立公文書館職員3名を受け入れる予定である。この1年のあいだに3組もの研修生を受け入れるという、修復室としてはかなり厳しい日程となるが、また新しい出会いが増えるので色々と準備を整えていかねばと前向きに考えている。

我々が研修を受け入れた、彼ら彼女らが資料保存の考え方を実践に移し、また日本の伝統的修復技術を用いて、母国の貴重な資料を少しでも残す努力をしてくれること、そして我が国立公文書館での研修の輪が、今は3ヶ国だけだが、今後世界中に広がって行くことが出来ればと願っている。

最後に、彼らからのお礼の言葉です。「我々の修復保存技術研修を快く受け入れてくださった国立公文書館館長はじめ職員の方々、そして指導してくださった日本の皆様へ」

「サラームアレイコム」